中上健次の「路地」解体後の文学世界をめぐる試論
～「韓国」というトポスの特権性と新たな解釈可能性へ～

李　恵慶（大阪経済法科大学 アジア太平洋研究センター）

「路地」の作家からその破壊者へ

中上健次（1946-1992）は「路地」という文学的虚構空間を通じ、"紀州熊野サーガ"と呼ばれる独自の文学世界を築き上げていた作家である。戦後生まれ初の芥川賞受賞者となった中上は、完成度の高い作品を次々と世に送り出し、早くから映画化・ドラマ化されるなど大衆的な人気も博していた。2011年にはまるで彼の20回忌を記念するかのように、小説『軽蔑』が映画化され、またもや話題を呼んだ。

「路地」の作家・中上が文学的に大きな転換点を迎えるようになったのは、これまで物語の磁場であり、作品の舞台でもあった「路地」が解体されるという大きな出来事によってである。この、中上文学にとって一大事な「事件」たる「路地」の解体が象徴的でかつ明確に描かれているのが『地の果て 至上の時』（1983年、以下『地の果て』）である。

この作品は「路地」という物語の世界の創造によって中上に念願の芥川賞の栄光を与えた『岬』（1976年）、そしてその続編となる『枯木灘』（1977年）とともに"秋幸サーガ三部作"と呼ばれる中上の代表作である。そこで彼は、みずから創り上げた「路地」をみずからの手によって解体し、最も真近なトポス「路地」と自分の分身でもある主人公「秋幸」を切り捨ててしまう。あまりにも唐突で危ういこの行為が以降の中上文学にいかに大きな影響を及ぼしていたのかは容易に想像される。だが、皮肉にもその解体が、「路地」をきわめて豊な「神話的な空間」として描きぬいた『千年の愉楽』（1982年）とほぼ時期を同じくして行なわれていたことは興味深い。

一見、相反するようにみえるこれらの作業が、同根のものとして文学的虚構空間である「路地」と現実の被差別部落とがイコールに結ばれていったことと不可分であり、それについてはこれまで何度も指摘されてきた通りである。中上が「路地」を被差別部落と同義語として使い始めるようになったのはちょうど1980年代に入ってからであり、それには地元をめぐるいろんな人の思惑や社会的複雑な背景が影響している。

中上の故郷新宮市では1970年代半ばから1980年代頭に掛けて日和山開発という再開発事業が実施された。これによって当然ながら町の風景は一変させられ、路地には一方では大手のスーパーが入り、他方では同和対策事業の一環として被差別部落民への公営住宅の供給が行なわれ、被差別部落は事実上消滅することになる。「路地」を解体した『地の果て』がこの実際の被差別部落の消滅の直後に発表されたことも、そしてその反動の如く「路地」が限りなく永遠に続く「神話的な空間」として練り上げられた『千年の愉楽』の出版もほぼ同じ時期であったことは単なる偶然でない。

かくして最も真近なトポス「路地」を失ってしまった中上文学は大きな文学的変容を迫られる。中上が天皇と「右翼」を主題化し、しばしば「失敗作」と呼ばれる荒涼とした『異族』（1993年、未完）に着手したのが『地の果て』のすぐ後であったことはその端的な例である。

このように「路地」の「神話的空間」としての練り上げと解体という出来事は、中上文学に大きな転換を迫ると同時に新たな世界への入り口でもあったのである。

天皇と差別-被差別の回路

中上の「路地」の世界は、あくまで文学的創造の産物であるとしても、もとよりきわめて政治的なものといわなければならない。それは歴史的な背景からそうである。「路地」のモデルに

なった中上の故郷新宮の被差別部落は、単に「穢多・非人」と呼ばれる人々だけからなる単一なものではなく、一向一揆によって生まれ落ちた者たちの部落でひとつの政治的結果であったからだ。しかし中上は『千年の愉楽』の前までには「路地」をめぐって一度も、たとえば「差別」といった語を使ったことはなく徹底的に虚構の世界を貫いた。

ただ単に「地」と一体化してゆくその世界では、丹生谷貴志が指摘したように、自己と現実の間のギャップや矛盾といったものがきれいにぬぐい切られ、がらんどうな自分から発された行動が自己充足な身ぶりとして捉えられる、いってみれば自己確認の作業のようなものになることは決してない。むしろそのからっぽな自分を徹底的に引き受けることによって逆に自分を取り巻いている世界がなだれ落ちるような世界である。

だがしかし、「路地」解体後の作品ではそれが差別－被差別の回路の導入により打って変わって政治的な問題として表面化する。中上は誰しもが認めるきわめて特異な作家であるが、差別問題についてもひじょうにユニークな考え方をしていて、二項対立的な図式として捉えることは決してない。その端的な例が「差別者は被差別者である」（全集14：611頁）という『紀州――木の国　根の国物語』（1978年、以下『紀州』）のテーゼや、天皇と被差別民を「日本の二つの外部」（全集15：584頁）として見なしていることである。

しかも差別－被差別をめぐる問題が部落問題に止まらず、より普遍的な問題へと拡大されていったことには注意しなければならない。「路地」の解体を前後とし、世界のさまざまなスラムやハレーム、ゲットなどに目を向けていたことや、『地の果て』の後に着手した『異族』での主人公たちが「路地」に生まれたタツヤ、在日朝鮮人二世のシム、アイヌモシリのウタリとなっていることはそれを物語る。「部落問題と朝鮮人問題と腹をこすり合わせるところで生まれてきた」中上が部落問題から在日朝鮮人問題へ、そしてアイヌや世界の「路地」へと、「内」から「外」にどんどん目を向けていったのはさほど驚きでない。しかもそれが最終的に「日本」を問い直すことへつながっていることは見逃してはならない。これについては後述することにし、ここでは「路地」の解体後の中上文学に天皇と差別－被差別の回路が導入され、しかもそれがより普遍的なものへと広がっていたことだけを強調しておこう。

より根元的な物語の磁場「さら地」

『地の果て』では「路地」の解体が最初から計画されていた。冒頭には、故郷に帰って来た主人公・秋幸がバスに乗る前にお土産屋で買った絵馬と御守袋の中身をバスの窓から投げ捨てるという、ひじょうに象徴的な場面が挿入されている。これはすなわち、自分の帰るべき〈故郷〉の根拠となるはずの地霊を捨てることであり、秋幸と「路地」との緊密な関係性はまるで彼の手に残った空っぽの御守袋のように空虚なものと化してしまっていることを表わす。

この事態は中上のいった、「事の始めから「路地」という世界のレベルは壊されているのである。絶対のレベルとしての「路地」を持ち出す事は誰にも許されていない、というのがこの小説の出発点だった」（全集15：196頁）ということに見事に呼応している。

ここで注意すべきは「絶対的のレベルとしての「路地」」という語で、『地の果て』で破壊され否定されていたのはまさしくそれである。「絶対的レベルの「路地」」とは『岬』と『枯木灘』という「先行作品での設定との関連」（全集15：194頁）で、読み手が自ずと期待してしまう「ありうべき」姿としての「路地」なのであり、これを裏返すと中上文学の物語の磁場としての「路地」が現実の被差別部落のように完全にテクストから消滅してしまったということを意味してはいないのである。「路地」の解体後、中上がますます世界の「路地」に目を向けていたのはそれと深い関係にある。

かくして『地の果て』では、秋幸の実父の浜村龍造によって境界という境界はすべて壊され、裏山と路地、新地、境界の跡すら残らないように周辺の跡かたもなく取り払われ、さら地にされ、放っておかれる。この「路地」の解体は以下の二点においてきわめて象徴的といわなければならない。

まずひとつは、先述の差別の問題と深く関っ

ている。浜村龍造が「路地」を「さら地」にしたのは、彼が「かつて虫として路地に入り込み虫の一匹を受精させ、外へ出ていった。路地は浜村龍造の憎悪の対象だった。商売敵からは路地の出の成り上り者と侮辱され、当の路地からは他所から流れて来たどこの馬の骨か分からないものが侮辱を晴らすように先祖をデッチ上げ、次々とペテンにかけ、蠅の糞として成り上ったのだった」(全集6:332頁)からである。「さら地」は「デッチ上げ」の上に成り立っていた浜村龍造の象徴的な姿に等しく、「差別とは、もともとそこに在った者が、新参者に対して守りを固めるという共同意識から」(全集14：510頁) 生まれるという差別の構造をも暴き出す役割をしている。

もうひとつは、そもそも「さら地」は「何の用途にも当てられていない」「未使用」(『広辞苑』)の宙づりの土地である。だがしかし、それがゆえにかえって根元的な〈場〉とな(りう)る。なぜならあらゆる境界が取り壊され、裸になっている「さら地」は、「路地」が形成される以前の原初的な姿に他ならず、結局のところ、こうした「さら地」の出現は起源をさかのぼっていく作業を象徴的に表しているからである。この意味で『地の果て』の「さら地」が、急に荒唐無稽な"ジンギスカン"忘想へと横滑りしていったのは偶然ではない。この望想によってもたらされる世界がどういうものかを明らかにするためには中上の折口信夫解釈を参照しなければならない。

中上が折口から至大な影響を受けていたのはよく知られている。しかしその影響関係は少し倒錯的である。中上は「折口信夫を破砕する事から私の欲する徹底的根元的な思考が始まり」、「折口学をズラし逆立ちさせて」いくことこそ、自分の「やる事」(全集15：178頁) と定義する。しかもそれは「折口がどんな時でもいつでも待ちこがれていたマレビトの視点を持ってこそ」(全集15：180頁) 可能となる作業である。この反-折口学的作業については紙面の制約上深入りはしないが、一言でまとめると、「マレビトを交通する原痕、さながら赤んぼうの尻にできる蒙古斑のようなものとして、マレビトを物語＝法・制度の基幹するものから解き放ち元の位置にもどす」(全集15：179頁) ことである。これこそ中上の「やる事」なのである。

するとようやく唐突にして荒唐無稽な"ジンギスカン"妄想の全体的な輪郭が見えてくる。端的に"ジンギスカン"はマレビトの元の姿であり、さら地はマレビトの「元の位置」の暗喩なのである。そして『地の果て』の「路地」の解体、さら地＝草っ原、そしてそれによってもたらされた"ジンギスカン"妄想は、マレビト＝天皇を頂点に据えた日本文化や差別の問題を問い直すという中上(文学) の「やる事」の具象化に他ならない。これをより大きな枠組みで実現すべく中上はより根元的な「さら地」を求めて世界へ流浪してゆく。

韓国というトポスの特権性

中上は1976年に香港、マカオ、シンガポールへ赴いて以降、80年代に入ると精力的に世界を駆け回る。それは何よりも「熊野は遍在する。山がある限りどこにでも熊野は在り、陰翳がある限り熊野は出現する」(全集15：318-319頁) という考えによる。その中で特に目を引くのはアジアの(再-)発見である。むろんアジアは世界の「路地」であるといった見方を打ち立てるのは容易であり、一面においては間違っていない。しかし中上のそれがそれほど単純なものでないのも事実である。

中上にとってアジアは、「路地」の解体と差別の問題とともに、モンゴロイドという「逃れられない宿命」として(再-)発見される。『地の果て』の"ジンギスカン"妄想は、まだ完全な形ではないが、その発見の延長線上で具象化されたものといってよい。結論を先取りすると、中上にとってアジアは世界の熊野として新たな「路地」であり、さらには『地の果て』の「さら地」のような最も根元的な〈場＝トポス〉なのである。

たがしかし、アジアといっても中上のアジアをめぐる言説の中心に据えられているのはもっぱら韓国である。中上によると韓国は、「香港やシンガポール、マレーシアに共振れし、スペインやモロッコに心を奪われた後だった」にも関わらず、「最も苛烈に反応するボディーヒートの場所」(全集8：184頁) であり、「他の文化圏の楽しさ素晴らしさを知った後での韓国体験は、他との共振れや眩惑と大きく違う」(全集8:185頁)という。むろんこれは韓国の特権性を垣間見せるものである。しかしそれが決して個人

の嗜好のレベルのものでないことは多言を要しない。

差別の問題をめぐり紀州・熊野を旅したルポルタージュ『紀州』では、紀伊半島と朝鮮＝韓国との連続性が象徴的に描かれている。冒頭から朝鮮＝韓国がいきなり「半島的状況」（全集14：481頁）と呼ばれる、半島の地形的特徴による共通性から普遍的に想起されているのは興味深い。だが最も注目に値するのはテクストの末尾の以下のような箇所である。

> 紀伊半島で私が視たのは、差別、被差別の豊かさだった。言ってみれば「美しい日本」の奥に入り込み、その日本の意味を考え、美しいという意味を考える事でもあった。
>
> ここにたとえば、「美しい朝鮮」という命題を入れてみよう。差異とは、朝鮮と日本の間にある。この夏、車で走り廻りながらカーステレオで私がカリブの音楽を聞き、朝鮮語のカセットテープを思いつくままかけていた。言葉は私には理解不能だった。意味のわからぬ言葉を耳にしながら、私はその走っている風景が朝鮮の風景だと思い込もうとし、歩く人らが韓国の雑踏を行く人と眼鼻立ちが変わらぬのを知り、ここが何故、日本なのか、日本の紀伊半島なのかを知ろうと思ったのだった。つまり言葉を変えてみれば、紀伊半島を汎アジアの眼でとらえてみるということである。（後略）（全集14:679頁）

紀伊半島の旅で発見された「美しい日本」は、そのまま「美しい朝鮮」へとシフトされ、そこでは中上の紀伊半島や日本を「汎アジアの眼でとらえてみ」ようとする姿勢が明確に読み取れる。これは「日本にいると往々にしてアジアが見えなくなる」「この国の今の風潮の中で、日本が他ではなくアジアに位置するのだという事を忘れてしまっている」（全集15：318頁）という認識と相通ずるものである。ところでそれが「アジア」ではなく「朝鮮＝韓国」と名指されているのは注意してよい。一見偶然に選べられたかのように見えるこれが、先述の「部落問題と朝鮮人問題と腹をこすり合わせたところで生まれてきた」という中上の発言を思い出すと何の不思議もない。

そうすると、『紀州』の後、間もなく連載が始まった「物語の系譜　折口信夫」での「マレビトを交通する原痕」として見直し、「元の位置にもどす」という中上の「やる事」や、『地の果て』で想起された"ジンギスカン"妄想は、「紀伊半島を汎アジアの眼でとらえる」作業と見なすことができる。この意味では、韓国＝朝鮮は「路地」の解体の後の新たな文学世界の創造とその実践を担う物語の磁場＝トポスとなる。類似したことが『地の果て』のすぐ後に発表された「もうひとつの国」（1983年）からも読み取れる。

> しかし、歴史的事実からして、クマノはむしろ、韓国からの影響にある。というのも、古事記の神武東征の条りに出てくる神武を失神させるほどの熊は、縄文をささえてアイヌ族の神であるが、朝鮮でも檀君神話に熊が現われる。クマノ、アイヌ語でカムイが神であるが、それなら、コマノという音の連想から、高麗野としてもよさそうだし、第一、絶対的確信を持って言うのだが、顔がよく似ているし、熊野全域に亘る他の土地の方言のポジとネガのように、妙なイントネイションの方言は韓国語によく似ている。（全集 15：375 頁）

「熊野のクマは韓国のコマ（高麗）に通じ」るといわれているように、韓国は熊野と歴史的連続性をもった「もうひとつの国」であり、さらには「路地」の生成に関わっていたことからしてより根元的な〈場＝トポス〉となる。『地の果て』後の韓国訪問の際に中上が「韓国へカムイ（神）をたどりに行く」（高山文彦 2000：399頁）といっていたのはそれと無関係でない。

結局、「紀州、紀伊が、私の眼に、日が当り輝きあふれる闇の国家であるように、その時、この日本も異貌を見せるかも。韓国はその異貌の日本への入口であり、パンソリや仮面劇は異貌へ誘うシグナルである」（全集15：100頁）といわれたように、韓国は単に世界に遍在する「路地」のひとつではなく、日本の「闇」を写し出す鏡であり「日本」に拮抗する強力な反措定としてのもうひとつの「闇」の国なのである。これこそ、中上が韓国を「クマノ植民地主義の元」（全集15：375頁）と名づけていた所以であり、中上（文学）における韓国という〈場＝トポス〉の特権性をこれほど的確に表わしたものは他にない。

『地の果て 至上の時』から『物語 ソウル』へ

中上は韓国をめぐって"韓国・ソウルサーガ"ともいえる作品群を書き残している。まずこの小論ではそのサーガをひじょうに広義の意味で用いていることをことわっておく。

代表的な韓国・ソウルサーガとしては、長編小説『物語 ソウル』（1984年）と、「風景の向こうへ」（1984年）、『輪舞する ソウル』（1985年）などのエッセイ、そして雑誌「すばる」に掲載された短編「町よ、ソウル イテウォンの女」（1986年）などが挙げられる。その中で最も注目に値するのが『物語 ソウル』である。

『物語 ソウル』でまず確認したいのは『地の果て』との連続性である。それはすでに指摘された、物語の舞台がヨンドンポというソウルの路地であり、主人公が白丁という韓国のかつての被差別階級の出身者であるといったことに見出すことはむろん可能である。しかしここで確認したのはそのような単純なものではない。とりわけ、両作品の連続性において最も重要で決定的な証左となるのは、ヨシ兄によって喚起された"ジンギスカン"妄想が『物語 ソウル』というテクストの根底に据えられているという物語構造である。

それを確認するためにまず、"ジンギスカン"妄想について詳しく述べられている「物語の系譜 折口信夫」に注目してみよう。

> （前略）ここはむしろヨシ兄の"ジンギスカン"妄想で、浜村龍造的世界から何物かが競り出てきたというべきである。それは浜村孫一神話の幾つかの側面をはっきり白日の元にさらしたと言えるのである。馬具、鉄砲、さらに浜村龍造という名のなかにある龍、片目片足の孫一、山人、という符丁から鉄人伝説を思い起こして来れぬだろうか。ジンギスカン→騎馬民族、遊牧民というヨシ兄の妄想による言説を受けて、浜村龍造とその子の秋幸は、くっきり浮かび上がってきた鉄人伝説、それは鍛冶神までさかのぼるかなかぬちとしての自分を自覚させられたと言うべきである。（後略）（全集 15:178-179 頁）

「さら地」から導き出されたヨシ兄の"ジンギスカン"妄想は、何もかもがデッチ上げの上に成り立っていた浜村龍造的世界を暴き出し、次第に物語を新たな世界へと横滑りさせる物語装置である。ここで注目すべきは、浜村と秋幸がその望想によって「鉄人伝説」「鍛冶神」へ接続され、それが自己認識の契機となっている点である。

「片目片足の孫一」という言葉からは、紀州の山奥に棲むといわれる一眼一足の一本だたらや、日本で鍛冶神としてよく信仰されている眼の一つの天目一箇神とのつながりをも強く思わせているが、それと同時にまた「浜村龍造とその子の秋幸」に「かなかぬちとしての自分を自覚させ」ていることはきわめて重要である。

これはすなわち、浜村と秋幸とが"ジンギスカン"と同格、もしくはその血を引いた子孫ということであり、彼らが「汎アジア」的な存在に拡大・底上げされていることを意味する。しかし残念ながら『地の果て』から実際にそこまで読み取ることは難しい。とはいっても上記の引用が『地の果て』の発表後、間もなく書かれた作家自らによる解説であることを考えると少なからずそうしたことが作者の意図としてはあったと考えられる。

同様なことが『物語 ソウル』でもほぼ同じく反復されている。『物語 ソウル』で、『地の果て』の秋幸と浜村龍造に呼応しているのはチャンギルと飴屋のアジシである。この二人は実の親子でない。朝鮮戦争の際に元兵士だった飴屋が戦争孤児になっていたチャンギルを引き取り、息子のように育てた。その飴屋がチャンギルに、朝鮮戦争については何度も「ああまでして殺し合うことになったのは、砲撃の音や機関銃の音で韓国人（ハングクサラム）の中に流れる、四千年来の騎馬民族の血に火をつけてしまったのだと説明」（全集8：110-111頁）する。

ここで「騎馬民族」という語が登場しているのは偶然ではなかろう。われわれはすでに中上において"ジンギスカン"と「騎馬民族」とのつながりを知っているからである。いずれにせよ、「騎馬民族」によって呼び寄せられた"ジンギスカン"は、直ちにチャンギルと飴屋に接続される。これは上記の引用の「ジンギスカン→騎馬民族」とは逆の形であるが、チャンギルと飴屋が秋幸と浜村龍造のもうひとつのバージョン、もしくはその反復であることには変わりない。

そしてそれをより確実なものとしているのが

飴屋の眼である。彼は以前鍛冶屋を営んでいて、「鉄や真鍮の細かい粉塵で眼をやられ、どちらか一方が眇になってい」（全集8：111頁）る。この片目の見えない飴屋の姿はまぎれもなく鉄人伝説や鍛冶神の具象化である。

類似したことはチャンギルからも見受けられる。一見、「どちらにも異常はない」（全集8：111頁）チャンギルの眼は片目の表象とは無関係のようにみえる。しかしもしチャンギルがベトナム戦争に行くことなく飴屋と一緒に鍛冶屋をやっていたなら、彼も確実に今の飴屋と同じくどちらかの眼をやられたはずである。ただ戦争で「銃口を片目で睨み、敵を狙ってはいずり廻った」（全集8：111頁）ために眼に異常がないのである。だが、ここでひとつ注意すべきは、そうしたチャンギルにおいて片目を睨んでいたベトナムの戦闘の記憶が帰還された後もまったく取れずにいるという点である。これはつまり、トラウマティックな記憶によって彼はつねにすでにベトナム戦争に取り戻され、「今」もなお「銃口に片目を睨」んだままであることを意味する。

結局のところ、「ベトナムの状態は動乱当時とよく似てい」（全集8：133頁）て、その類似性からベトナム戦争はまたもや朝鮮戦争と同じく「騎馬民族の血に火を付け」られた戦争なのであり、帰還後も参戦の記憶によってつねにすでに「銃口を片目で睨」み、片目を盲目にしているチャンギルの姿は、飴屋が見えない眼を瞑って飴のぶつぶつに煮立つ釜の中を覗き込む姿と酷似している。この意味で眼に異常のないチャンギルも"ジンギスカン"望想や片目の鉄人伝説、鍛冶神の姿・表象を共有していることは間違いない。

以上のように、チャンギルと飴屋は、紀州・熊野の「かなぬち」が「汎アジア」的レベルで具象化されたもうひとつの"ジンギスカン"＝浜村・秋幸なのであり、こうした両テクストの登場人物の近親性は物語の連続性を保証し、『地の果て』と『物語　ソウル』を急接近させている。

中上文学とポストコロニアル

さて、『地の果て』と『物語 ソウル』の連続性が確認されたところで、『物語 ソウル』のもうひとつの特徴であるポストコロニアルの視点――これは"韓国・ソウルサーガ"すべてのテクストに横たわっている最大の特徴である――に移ってみよう。

『物語 ソウル』でまず看過できないのは、主人公チャンギルがベトナム帰りの元韓国軍兵士という設定である。ベトナム戦争は当時の韓国社会ではまだタブー視され、それが前面に取り上げられた作品は皆無に違い状況であった。しかし偶然にも『物語　ソウル』と時期をほぼ同じくして韓国でもベトナム戦争の悲惨さを描いた安正孝の「戦争と都市」――これは後に『白い戦争（ホワイトバッジ）』（1992年）として出刊され、大きな反響を呼んだ――の連載が始まっていたことは付け加えておこう。まだ軍事政権が続き、政治的にも厳しかった時代に、最もタブー視されていたベトナム戦争を同時代の日韓両国の小説家がそれぞれ問い直していたことはこれだけでも示唆するところは大きいと思われる。

そもそもベトナム戦争がどのような戦争で、なぜ韓国軍が派兵されることになったのかといったことについてはここで論じるまでもないが、『物語 ソウル』では以下のように述べられている。

> ベトナムへ行った者のうちで、好きこのんで志願したものは一人もなかった。若衆らが韓国国民の義務になっている徴兵の年齢に達した時、ベトナムでは美軍だけでは持ちこたえられない状態になり、ベトナムの状態は動乱当時とよく似ていたし、さらに動乱当時、北からの侵入に立ち向かった時、美軍に救けられたこともあり、韓国はベトナムへ派兵したのだった。長い日帝の植民地下におかれ、動乱の破壊が加わり、韓国は美国に従いていかざると得なかった。ベトナム人の血が流れたし、韓国の若衆らの血が流れた。戦争に勝つことなく美国は撤退し、韓国も撤退した。ベトナムは赤化した。屈辱は美国人だけのものでなかった。ベトナム帰りの韓国兵の屈辱は、二重にも三重にも折れ曲がった。繁栄が広がると、人にはベトナム帰りは忌み物のようにみえた。（全集 8：133 頁）

チャンギルは朝鮮戦争の際、パルチザンに両親を殺され、飴屋に拾われた戦争孤児である。そのため、彼のベトナム参戦は両親を殺した「赤」への敵討ちでもあった。このような「赤」へ

の嫌悪は、当時の、「反共」を国是にし、分断国家としてのシンパシーに訴えかけることでベトナムへの参戦を実行した韓国社会・政権に見事に呼応しており、またベトナムに派兵された元韓国軍兵士たちにとっては参戦の「大義名分」となる。

しかしそうした「大義名分」とは裏腹に、裏では派兵による特需とアメリカからの援助、そして1965年の日韓国交正常化による経済協力資金という大きな取引を行なっていたのは今更いうまでもない。

結局、経済発展のためのお金と引き換えに若い人たちの惨たらしい「血」がベトナムの地を赤く染めていたのである。そのお陰でソウルにはまるで勃起した男根のように彼方此方に高層ビルが屹立し、大きな財閥が誕生し、物は溢れ、時代は「ベトナム戦争以降、眼でしかと捉えられないスピードで、大きく変わってい」（全集8:114頁）く。そのスピードに目を狂わしたソウルはあたかも「大きな遊園地」（全集8：137頁）のように化し、現実の何もかもを忘却していく。

その中で韓国のベトナム帰還兵は英雄となるどころか、社会の「忌み物」扱いを受ける。国のために「殺さないと殺される」ジャングルで「ヘロインを射ちつづけ」（全集8:146頁）ながら「同じ黄色い肌のアジア人同士、ベトナムでは殺し合いを演じ」てきたのに、「軍からも疎まれ、ベトナム帰りが戦友会の会合を開くと監視さえついて」（全集8：133頁）しまう始末となる。

当然ながら彼らは「韓国を牛耳っている財閥に」も、「韓国のそばにあって、韓国を抑え込み、動乱や戦争のたびに甘い汁を吸い、肥える日本に態度の柔らかい政府にも、容共的とさえみえる軍にも不満」（全集8：133頁）が募るばかりである。そこでチャンギルは、同じくベトナム帰還兵らを集め、「猛虎会」という右翼組織を作り、親玉となる。一心同体かつ「男同士の血の結びつき」（全集8：146頁）という強固なホモソーシャルな関係で結ばれたチャンギルと若衆らは、「腐敗堕落、不正のない論理と、礼のきっちり行き渡った韓国をつくるため」（全集8：153頁）に一方では義賊として財閥の倉庫を強奪し路地の人に横流ししながら、他方では反体制派の大物政治家Kの暗殺を計画するに至る。

『物語 ソウル』でのベトナム帰還兵をめぐる言説から見逃してはならないのは、彼らが社会の「おぞましいもの（アブジェクション）」として抑圧・棄却されていることである。これにどういった意味が込められているのかは中上の他のテクストを交えて詳しく検討を行なわなければならないが、とりわけここではアメリカのベトナム帰還兵に関する多くの先行研究を参照し結論だけを示しておくことにする。

ベトナム戦争は現代史において主に「被害者」として自己を規定してきた韓国が初めて「被害者」でもあり「加害者」でもあるという引裂かれた立場、つまり植民地的無意識と植民地主義への熱望の間で行なわれた〈他者〉とのトラウマ的な遭遇の経験なのであり、チャンギルを初めとするベトナム帰還兵への棄却＝アブジェクトは、そうしたベトナム戦争が植民地支配の脱却から強固に築いてきた韓国のナショナル・アイデンティティを根本から揺るがす歴史的出来事であるという事実と無関係でない。これこそ、「二重にも三重にも折れ曲がった」「ベトナム帰りの韓国兵の屈辱」の原因に他なるまい。

然してベトナム帰還兵によって浮き彫りになった韓国のポストコロニアルな状況は、自ずと日本への問いにつながる。

> 長い李王朝が日本の統治で終り、三十六年間の日本統治が終っても民族は一つになることが出来ず、二つに割れ、あまつさえその二つは血で血を洗う戦争をし、いつ戦争になるか、いつまた抜け目のない日本に口先三寸でしてやられるか分からない状態の中で、田畑をつくり、工場をつくってきた。誰の心の中にも急激な暮らしの変化を不安に思い、昨日までの韓国人（ハングクサラム）の風習が今日は役に立たないという不満はくすぶっていた。だが、急激に変化しなければならない。というのも一方に相容れない主義を持った国があり、片一方にずるがしこい国がある。そこは主義主張は同じでも、三十六年間名前を取り上げ、言葉を取り上げて、韓国人（ハングクサラム）であることが罪悪だというようにしむけていて、自分の国の体制が変るとまたぞろ自分の国と同じしくみではないからと非を鳴らし、油断すると骨の髄までしゃぶりつくそうとするのだった。逆にその二つさえなかったら、大韓民国（テハンミングク）は急ぐことはない。（全集8：117頁）

ここで「韓国人」という語が繰り返し出ているのは、ポストコロニアルな状況がアイデンティティの問題に深く関わっていることを示す。 つねにすでに「シャーマンや巫女と同じ状態におくことで」「地霊と交感」し、「韓国のすべてを感光」（全集15：63-64頁）しようとしていた中上が韓国のポストコロニアルな状況に敏感でないはずがなく、そしてその思考を進めていけばいくほどそれは自ずと日本の植民地主義や（ポスト）コロニアルへの問いにつながる。この問いは過ぎ去った過去に関するものではない。むしろ「今」の問題、つまり記憶の問題であり、ナショナル・アイデンティティの問題であり、特に日本においては天皇の問題である。「マレビト＝天皇」を「元の位置にもどす」ことを「やる（べき）事」として定義していた中上において、この問題は絶対通り過ぎることのできないものであったに違いない。

とはいうものの、韓国のポストコロニアルな状況をめぐって中上がどこまで理解をもち、自覚的であったのかはまだ議論の余地があり、『物語 ソウル』だけでは不十分であることは否めない。しかし「日本が踏みつけた韓国の一番下に、動乱とベトナムで流した韓国人（ハングクサラム）の血があり」（全集8：133頁）「二重三重にねじ曲がった」屈辱といわれていることから読み取れるように、中上が韓国の複雑で相矛盾したポストコロニアルな状況を的確に捉えていたのは確かであり、『輪舞する ソウル』でのテクストを引き裂く多くの矛盾や亀裂をも含めて中上文学をポストコロニアルの視点から読み直す意義は十分にあるといえる。